

—ロシアが核兵器を使う可能性はあるか。

考えたくないが、ある。それは、ロシアが劣勢になり、極限まで追い詰められた時だろう。ウクライナになるべく大きな打撃を与え、戦闘意欲を失わせるため核で都市を攻撃するかもしれない。

東京大の藤原帰一名誉教授（国際政治学）のインタビュー記事を読んで、ぞっとした。だが、この状況を黙って見逃すわけにはいかない、と私は思った。

8月26日、米ニューヨーク国連本部で開かれていた核拡散防止条（NPT）再検討会議は最終文書に合意できないまま閉幕した。7年前の前回会議に続く決裂だった。最終文書案に、ロシアが土壇場で反対を表明したのだ。ウクライナ侵攻でロシアが占拠したザポロジエ原発を巡って、ウクライナによる管理の重要性に言及したことなどに反発したからだ。ロシアによる核兵器使用の威嚇と、原発を戦闘に巻き込んだことで生じた未曾有の危機を、私は決して許せないと思う。ただ、この結末に対する批判をロシアだけが受けることに私は賛同しない。なぜなら、NPTは5大核保有国を含む加盟国に対し、核軍縮について「誠実な交渉」を義務付けているが、核保有国がそれを行っていないと思うからだ。

会議の途中で浮上した論点が次々に骨抜きになった。保有国に「核先制不使用」を促す文言はあっさり削除された。兵器用核分裂性物質生産の一時停止要求も姿を消した。6月に第一回締約国会議が開かれた核兵器禁止条約の意義を含む文言も落とされた。最終文書案の内容の薄さが示す核軍縮の停滞について、核兵器禁止条約を推進するICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）のフィン事務局長が『『ウクライナ侵攻が言い訳として使われている』と断じた』という記事に私は大きく頷いた。

—核兵器に頼る安全保障から脱するため、被爆地はどう行動すべきか。

核兵器の使用を何としても避けなければ、という訴えを今こそ広げるべきだ。広島・長崎では、原爆による多くの被害の記憶が語り継がれてきた。……被害の現場を見つめ「こんな悲惨なことを起こしてはならない」と訴え続けることが重要なのだ。

藤原帰一教授の主張に、私は深く納得する。「こんな悲惨な」非人道の惨劇を、広島・長崎の被爆者が訴えてきたからこそ2017年、核兵器禁止条約は国連で採択されたと私は考えている。条約の中に「ヒバクシャ（Hibakusha）の苦痛と被害に留意する」と記されたこと、そして、ICANがノーベル平和賞を受賞した際に広島で被爆したサーロー節子さんが演説を行ったことがその裏付けであろう。

だからこそ、そして、いまこそ、私たちが悲惨な証言をヒバクシャから直接聞くことができる最後の世代という自覚を胸に、その反核と平和へ願いを受け継ぎ、積極的に活動しなければならないと思っている。

「みんな、手をこうして前にあげてね……手の指の先からね、昆布かわかめを泥水に浸したような真っ黒いものがね、ぶら下がってるのよ。一人、また一人。お母さん『熱いよ、痛いよ』とうめきながら、泣きながら死んでいったのよ。それはもう地獄でございました」今の私とほぼ同じ15歳の女学校時代に広島で被爆した切明千枝子さん（92歳）の証言だ。私は仲間と共に、切明さんへのインタビューを文字におこして『ヒロシマを生き抜いて』（全2巻）という証言集にまとめた。ヒバクシャが見た「あの日の地獄」と、それを生き抜いた証を記録し、時代への記憶として発信するために。それは、誰でもできるし、誰もがやらなければならないことだ、と私は思う。核廃絶への道筋を立て直すためにも、NPTの議論任せにして手をこまねくことがあってはならない。広島は落胆している暇などない。